

学界動向

ヘーゲル・コンGRES報告

中 埜 肇

今年言うまでもなく一七七〇年に生れたドイツの大哲

者ヘーゲルの生誕二百年にあたる。そこでこれを記念するさまざまな行事が世界各地で催されたが、ドイツでも東西両方でそれぞれ記念国際学会（以下これをヘーゲル・コンGRESという）が開かれた。西ドイツのものは七月十二日から十五日まで、ヘーゲルの生まれた南独シュトゥットガルトにおいて、国際ヘーゲル連盟（Internationale Hegel-Vereinigung）とハイデ

ルベルクのアカデミーとシュトゥットガルト市の三者共催であり、また東ドイツのものは八月二十三日から二十九日までの一週間、東ベルリンにおいて、東独（ドイツ民主主義共和国）政府とベルリン・ドイツ・アカデミーとフンボルト大学と国際ヘーゲル協会（Internationale Hegel-Gesellschaft）の四者共催

のものである。

これよりさきに私は国際ヘーゲル協会の会長であるヴィルヘルム・バイアー（W. R. Bayar）教授から東ベルリンのコンGRESで報告を行うようにとの誘いを受けていたので、これを機会に両方のコンGRESに参加した。以下に記すのは上記二つのコンGRESに関する、私が見聞した限りでの、簡単なレポートである。

I

西独のコンGRESの会場はシュトゥットガルト市の音楽会場リーダー・ハレである。七月十二日（日）午前十一時よりこのモーツァルト・ザールでコンGRESの開会式が行われ

た。この式典はこの市が世界に誇るカール・ミュンヒンガー指揮の室内管絃楽団が演奏するバッハの曲でその幕を開ける。

続いて市長クレット博士、バーデン・ヴュルテンベルク州の文化庁長官、連邦共和国の経済協力省大臣の式辞があり、最後にハイデルベルク・アカデミーの院長であり国際ヘーゲル連盟の会長であるガダマー(H. G. Gadamer)教授の演説があった。市長はヘーゲルの略歴を簡単に述べてから、「この生涯を通して彼は常にシュヴァーベンの子であった。シュヴァーベン風の堅実さを彼は持ち続けた。もしこれが無ければ彼の人格も業績も存在し得なかつたであろう。このように彼は生涯にわたって私たちのこの土地の真の息子であった。しかし同時に彼の思想と学問はこういう限界を越えて世界的なものとなった。」と語り、「ヘーゲルは現代においてもはや決して『死んだ犬』ではない。今世紀になってヘーゲルそのものに意義深いルネッサンスが到来した。まことエルンスト・ブロッホの言うように、いかなる未来もヘーゲルを否認しないであろう。」と結んだ。またガダマー教授はヘーゲル哲学の現代的な意義と価値とを社会理論と宗教(神学)と科学の面から強調した。このガダマー教授の視角はそのままこのコン

ヘーゲル・コンGRES報告(中絶)

GRESそのものの問題意識に連なるものであることが、やがてコンGRESの構成や進行からはっきり知られることになる。

またシュトゥットガルト市は、今年ヘーゲルの生誕二百年を機会に「ヘーゲル賞」を設定し、三年に一回、精神科学(人文科学)の面で顕著な業績を挙げた人に賞金一五〇〇〇マルクを贈ることに決定していたが、その第一回授与式をもこのコンGRESの開会式は兼ねていた。そして最初のヘーゲル賞はハンブルク大学の古典文献学の教授ブルーノ・スネル(Bruno Snell)博士に対して、市長から授与された。続いてスネル教授が短い講演を行い、最後に再びミュンヒンガーとシュトゥットガルト市内管絃楽団の演奏があつて、この式典の幕は閉じられた。

コンGRESの開会と時を同じくして、この日から十月四日まで、シュトゥットガルト市の資料館で「ヘーゲル—生涯と仕事と影響—」と題するヘーゲル関係資料の展示会が開かれた。午後六時、ヘーゲル・フィロロークとして有名なニコリン(Er. Nollin)教授の説明があつてからコンGRES参加者に、一般参観者に先立って、資料展の閲覧が許された。展示資料はその点数およそ五〇〇におよび、公の歴史的な文書か

らヘーゲル及び同時代人の日記、書簡、肖像その他、量質ともに水準の高いものであった。ここで私は多くのことを教えられたが、いくつかの疑問にもぶつかった。その一つを紹介すると、ヘーゲルがイギリスの経済学に深い関心を寄せ、その研究から彼の市民社会論を構想したことは周知の通りである。そのうち彼が最も早く研究したのはスチュアートの

『経済学原理』であった。彼はこの書物の独訳を熱心に読み、注解を付けたと言われる。そしてヘーゲルが読んだというこの独訳（もちろん手沢本ではない）の第一巻（ハンブルク、一七六九年刊）がこの資料展に陳列されていた（ポーフムのルール大学ヘーゲル文庫蔵）。ところがこの書物の標題に著者名がジ、ョ、ン、スチュアートとなっていた。しかしイギリスの経済学者の名前はジ、エ、ームズ、スチュアートである。これは単なる誤りであろうか。もしそうとすれば、このような愚かしい誤りがなぜ起ったか。またその誤りについてこの展示会で一言半句の説明もないのは何故か。

さてこのコンGRESは翌七月十三日から本格的に始まったが、その主体は七個のコロキウムである。Ⅰ自然科学、Ⅱ神学、Ⅲ美学、Ⅳ政治哲学、Ⅴマルクス主義、Ⅵ新カント主義

と現象学、Ⅶ科学哲学。開会式におけるガダマー教授の演説からも判るように、このコロキウムのテーマがこのコンGRESの視点から見たヘーゲル哲学の現代的な意義と考えてよいであろう。コロキウムは昼間に行なわれ、夜間は三回の公開講演会があり、その他に公開のパネルディスカッションと非公開講演がひとつずつあった。

コロキウムⅠの自然科学部門での報告にはヘーゲル哲学と自然科学との関係、もしくは自然科学の現段階から見たヘーゲル哲学への評価というような根本的な問題に触れたものはなく、むしろヘーゲルの自然哲学において取扱われた素材に関する現代的視点よりの解明といった傾向のものが多かった。これは自然科学者がヘーゲル哲学（というより哲学そのもの）をまともに取扱うことがないということの証拠であろう。そしてそのことは哲学者にとってやはりきわめて遺憾なことと言わなければならないであろう。

コロキウムⅡの神学部門では「哲学的思弁とキリスト教神学」という総合テーマの下に、極めて質の高い報告と活潑な討論が行なわれた。これはとくにプロテスタント神学において、数年前までの実存哲学にもとづく論議が最近ではヘーゲ

ル哲学を論理的支柱とするものへと移って来ているという傾向と明白に対応するものである。しかも神学の分野におけるヘーゲル哲学の評価は、プロテスタントのみならずカトリック神学でも顕著になったと言われている(言うまでもなく、ヘーゲル自身はプロテスタントであり、その哲学はこの信仰の体系化であると考えられている)。ミュンヘンのバンネンベルク(W. Panenberg)、『シュトゥットガルトのマウラー』(R. Maurer)、『ローマのヘンリチ(P. Henrich)』、ベルリンのブーダー(M. Puder)などすぐれた学者が報告し発言して学問的な刺激が極めて豊かであった。

七月十四日はコロキウムⅢ美学、Ⅳ政治哲学、Ⅴマルキシズムが行われた。政治哲学部門ではやはり現代のヘーゲル哲学研究の状況と反映して、神学と同様に質の高い報告と討論とが行われた。とくに出色だったのはハイデルベルクのマンフレート・リーデル(M. Riedel)と前記のマウラーなどである。ただこのコロキウムでは経済学的な観点よりするヘーゲル・アブローチがほとんど見られなかったことは、いわゆるフランクフルト学派的な発言が無かったことともに、このコングレスそのものの性格と限界とを示していると言えるであ

ヘーゲル・コングレス報告(中絶)

らう。つまりそこには主宰者であるガダマー教授の偏好がかなり鮮明に出ていると言っても過言ではない。事実このためにこのコングレスにおいて報告できなかった人、逆にコングレスをボイコットして強烈な批判を行なった人がいることからその間の空気は明らかである。フランクフルトのある研究者は、自分はこのような偏向のあるコングレスで発表することを潔しとしないという前置きをつけた論文を場外で配布したし、シュトゥットガルトのマックス・ベンゼ(M. Bense)教授は、パネルディスカッションの司会者に指名されたにもかかわらず、これに出席せず、新聞に強烈なコングレス批判を載せて、「こんな閉鎖的なコングレスはやめる」「第一回ヘーゲル賞がブルーノ・スネルに与えられたのは誤りだ」などと論じた。また例えばコロキウムⅥの新カント主義と現象学というテーマが一般に考えて、現代におけるヘーゲル哲学の意義をめぐるそれほど重要なテーマであるとは思えない。こういうテーマの選び方にも国際ヘーゲル連盟の性格がよく表われていると思うのは私ひとりではあるまい。

十四日午後のマルクス主義コロキウムには注目のマルクーゼ(H. Marcuse)が登場した。固唾を飲んで耳を傾ける満堂

の聴衆に向つて、彼が開口一番述べたのは、「人間の社会的存在が意識を決定するというマルキシズムの根本原理が、今やマルキシズムそのものに適用されなければならない」ということである。そして彼は現代の独占資本主義という社会状況に直面した場合の古典的マルクス主義の限界を指摘し、資本主義社会の崩壊の必然性を説き、新しい革命主体の形成について語り、その点における感性（理性から解放された）の役割を強調した。

このマルクラーゼの報告は彼の思想の発展を辿れば、そこにとくに新奇なものを見出すことはできないが、二十世紀後半の世界の一部を代表するイデオログとしての彼の発言がこのコングレスのひとつの見せ場であったことは否定できない。マルクラーゼの報告の華やかさの影になってしまったが、フランクフルトのフェッチャー (I. Fetscher) 氏の「ヘーゲルとマルクスにおける歴史的運動法則」という報告もすぐれたものであった。

コングレスの最終日には先にもちよつと触れたコロキウムⅥ新カント主義と現象学およびⅦ科学哲学が行なわれた。前者において最も注目すべき報告は、ハンブルクのライナー・

ウィール (R. Wieth) 教授による「現象学と弁証法」であり、後者では全体テーマとして「科学と歴史—科学理論に関する問題の規範的な分析は歴史への依拠を前提するか」という、ある意味では社会科学的方法論の基礎に関する問題が選ばれたが、残念ながら私は聴くことができなかった。このテーマは考えようによつては、このコングレスにおいて取扱われた問題の中でもっとも意義深いものと言うことができるであろう。少くとも私自身は、一度はそういう形で社会科学との対決を試みたいという誘惑を感じる。

最終日のコロキウムの後で「現代哲学におけるヘーゲル」という題で公開のパネルディスカッションが行われ、主として学生が、現代の状況の中でヘーゲル哲学を、いや哲学そのものを学ぶことの意味を問ひかけ、学者との間にかなり活潑な応酬があった。そしてその夜、ペッゲラー (O. Poggeler) 教授による「ヘーゲル研究の展望」と題する講演と国際ヘーゲル連盟の総会があつて、このコングレス全体が終つた。

なお公開講演としては、十二日にカール・レーヴィット (K. Löwith) 教授による「世界精神と世界史」、十三日にデーター・ヘンリヒ (D. Henrich) 教授による「ヘーゲルと

ヘルダーリン」、十四日にハンス・マイヤー(H. Mayer)教授による「近代文学(ホフマンスタール・ブレヒト・ベケット)におけるヘーゲルの『主と奴』があった。レーヴィットはヘーゲルとハイデッガーとの本質的な結びつきを歴史意識において確認し、それをそういうものとして根本的に批判しようとした。これは講演者自身の書物から知られる基本的な視点である。またヘンリヒはヘーゲル哲学の形成におけるヘーゲルとヘルダーリンとの思想的な関係を世に行われている誤解や偏見から解いて、正しい姿において把握しようと試みた。因みにヘンリヒ教授は国際ヘーゲル連盟の次期会長に選任され、最近数週間にわたって来日され、いくつかの講演を試みられた。

II

東ベルリンでのヘーゲル・コングレスに出席するにあたって、このコングレスが東独国家の首都で、しかもその国家の主権で開かれることを可能にする前提条件としての、東独におけるヘーゲル評価の基準は現在どのようなものであるかという疑問が幾度か私の念頭を去来した。コングレスが開か

ヘーゲル・コングレス報告(中絶)

れるということそのものが、東独ではヘーゲルがもはや単にブルジョア観念論の絶頂とか、プロイセン君主主義国家の御用哲学者とかいうかつてのネガティブな公式主義的評価を脱していることを示しているからである。

この私の疑問は東独に入ると直ちに解かれた。というのはそれに対する答えを私は至るところに見出すことができたからである。そして東独での現在におけるヘーゲル評価の基準は先ず第一に『空想から科学へ』の序にあるエンゲルスの「われわれドイツの社会主義者たちは、サン・シモン、フーリエおよびオウエンの子孫であることを誇りとするばかりでなく、カント、フィヒテおよびヘーゲルの子孫であることを誇りとする」という有名な言葉である。そしてその裏づけとして「ヘーゲルの弁証法はマルクス主義世界観の決定的な基礎である」というレーニンの命題が登場する。この二つの文章が現在の東独におけるヘーゲル評価の第一の基準であると考えてよいであろう。

次にその第二の基準を、私は八月二十三日(日)夕方フンボルト大学で行われたコングレス開会式における副首相アレクサンダー・アプシユ博士の演説の中に見出した。すなわ

ち氏によれば、ドイツ民主主義共和国はドイツ民族の産んだ唯一のヒューマニスティックな社会主義 (Humanistischer Sozialismus) の国家であり、それを着々と実現しつつあるが、この社会主義はドイツのフマニスムスの歴史的传统の中にしっかりと根ざしている。そしてこのドイツ・フマニスムスの伝統をゲーテやシラーと共に明確に定礎したのがヘーゲルであるという。ただしこのフマニスムスの内容を明確に規定することは為されなかった。

従ってこのように見ると、ヘーゲルは一方では弁証法哲学によって、他方ではフマニスムスによって東独国家の思想的基盤とその根本において結びついているということになり、この二点によってヘーゲル哲学に対する新しい肯定的な評価が決定されるわけである。

同じ開会式の演説の中で、国際ヘーゲル協会の会長であるバイアー教授は、今年ヘーゲル・コンGRESを開くことの意味は単に大哲学者を偲んで記念祭を催すところにあるのではなく、過去および現在の誤ったヘーゲル像を破碎して、その哲学の正しい姿、すなわちそれが本質的に革命の哲学であることを認識し、この認識に基づいてわれわれ自身がヘーゲ

ルの強調した「現実」の意義を洞察し、ヘーゲルを貫き、ヘーゲルを越えてデンケンするところにあるのでなければならぬ。その意味でこのコンGRESは何よりも思惟デッケンの祭典であると強調した。バイアー教授のこの視角はまさしく彼がその著「ヘーゲル像―さまざまのヘーゲル解釈の批判―」の中で保持し、敷衍している彼のヘーゲルに対する基本的な姿勢にほかならない。

その他当日にはベルリン・ドイツ・アカデミー院長代理およびフンボルト大学総長の挨拶が行われた。

翌二十四日午前はアカデミーで一般講演があった。先ずブリュッセルのペルルマン (Ch. Perelman) 氏が「弁証法と対話」という題で、ギリシヤからカントに至るまでの弁証法の歴史を概観し、そのうえでヘーゲル哲学における体系と方法の矛盾を論じ、その思弁性を批判した。次にはモスクワのコプニン (P. Kopnin) 氏が「弁証法と論理学と認識論との統一に関して」と題して科学としての弁証法を基礎として、論理学と認識論が統一されることを論じ、プリンストンのゴットハルト・ギュンター (G. Günther) 氏が「新しきものの歴史のカテゴリー」という題で構造主義の立場からヘーゲルの歴

史哲学について極めて精緻な分析的批判を行ない、最後にベルリンのマンフレート・ブール (M. Baier) 氏が「歴史の弁証法的構造」と題して歴史における科学的法則性の問題を論じた。この四人の講演の中ではギェンター氏のものが最も新鮮で密度が高かったと私は考える。

東ベルリンのコンGRESは全体が四つの部会から成っている。第一部会のテーマは「レーニンへのヘーゲル批判」であり、第二部会は「言語と意識」を、第三部会は「自然弁証法と史的弁証法」を、第四部会は「ヘーゲルと市民社会の問題」をそれぞれテーマとする。このテーマの選び方をシュトゥットガルトのコンGRESと比較して見ると、やはりそこに両コンGRESそのものの性格に根本的な相違があることが明確に認められる。また西のコンGRESにも社会主義的な立場をとる参加者はあったが、それはすべて西欧圏の人であって東欧圏からの参加者は無かった。これに対して東のコンGRESには、もちろん数において東欧圏からの参加者が圧倒的に多かったが、西欧圏からも少数ながら非常に優秀な学者が参加していた。さらに参加者の出身国を見ても、東のコンGRESの方が意味では西よりも開放的であったと言えることができる。

ヘーゲル・コンGRES報告(中絶)

因みに国際ヘーゲル連盟の会長であるガダメー教授と国際ヘーゲル協会の会長であるバイアー教授との間にはかなり烈しい対抗意識と敵愾心とがあつて、相互に相手を敵しく批判し合つてしていると聞いた。しかしこういうことは世界のヘーゲル研究にとつて不幸な事態であると言わなければならないであらう。

さて八月二十四日午後から始まった第一部会「レーニンのヘーゲル批判」では、モスクワのオイザーマン (T. I. Oizerman) 教授の「レーニンとヘーゲルの社会哲学」、バイアー教授の「ヘーゲルとレーニンの思惟における円環の意味像」、イエナのメンデ (G. Mende) 教授の「レーニンの唯物論的な読み方におけるヘーゲル」、ベルリンのグロップ (R. O. Gropp) 教授の「社会的歴史的認識に関する思想」、同じくベルリンのコージング (A. Kosing) 教授の「認識過程の弁証法的性格」などが注目を惹いた。

二十五日の第二部会「言語と意識」では、このテーマに対してさまざまなアプローチ (例えば唯物論の立場からする認識論的な試みのほかに、ヘーゲルの言語に関する日常言語派的な分析や統計的な報告など) が行われ、それをめぐつて哲学というものの

一四三(五五九)

あり方について東欧と西欧との間にかなり烈しいやりとりがあった。そこには現代哲学という場における普遍的な対立の一面が露呈されていた。この部会でマルキシズムからする報告として、グライフスヴァルトのアルブレヒト (E. Albrecht) 教授の「言語と意識との関係に関する弁証法的・唯物論的解釈と観念論的解釈との対立について」というものがすぐれていた。

二十六日に行われた第三部会「自然弁証法と史的弁証法」は、さらに「自然弁証法と史的弁証法」、「自然弁証法（自然哲学）」、「歴史弁証法」、「弁証法の一般的諸問題」、「自然科学における弁証法の特異問題」という五分科会に分れていた。この中でとくに注目すべきものは、「ヘーゲルとマルクスにおける歴史弁証法の特異性」というポワティエのジャック・ドン (J. Dhondt) 氏の報告、「ヘーゲルの歴史弁証法の方法的成果について」というベルリンのヘルマン・ライ (H. Ley) 氏の報告、「労働と歴史弁証法」というゴットフリート・シュティラー (G. Stier) 氏の報告などであった。またこの五分科会ではヘーゲルと自然科学との関係に関するかなり積極的で根本的なアプローチが見られたことは注目に値しよ

う。

八月二十六日夜には東独政府主催によるヘーゲル生誕二百年記念祭典がフンボルト大学のマルクス・エンゲルス講堂で行われ、アブシュ副首相が「ヘーゲルと現代」と題する講演を行った。その中で同氏は古典的ブルジョア哲学の完成者であるヘーゲルは同時に勃興しつつあったドイツ・フマニスムスの発展の象徴であり、またマルクス、エンゲルス、レーニンによって完遂されるべき革命哲学への出発点であることを指摘し、さらにヘーゲルの鋭く大胆に未来に向けられた眼と彼の深い人間的思想によって培われたフマニスムスと、ブルジョアの限界を今一步で超えんとする彼の世界認識とが、マルクス、エンゲルス、レーニンによる否定的改造を経て今や東独国家における社会主義的現実の中で結実しようとしていることを強調した。この演説は先に述べたヘーゲル評価の二つの基準を敷衍展開したものと解することができるであろう。八月二十七日は言うまでもなくヘーゲルの誕生日であるから、午前はドロテーン墓地にあるこの大哲学者の墓前に花環を捧げる儀式が行われ、私も参列した。

同日の午後から第四部会「ヘーゲルと市民社会の問題」が

始まった。この部会も「ヘーゲルの市民社会観の歴史的源泉」、「市民社会の本質と矛盾に関するヘーゲルの思想」、「歴史における市民社会」、「市民社会における国家と法に関するヘーゲルの思想」、「ヘーゲル哲学の影響の史的考察」という五つの分科会に分れていた。この部会は報告者の数も最も多く（私もそのひとりであった）、討論も活潑で、従って東西の思想的な対立もとくに鮮明なかたちで現れていた（それはこの部会には西欧圏から来た優秀な学者が多く参加していたからでもあろう）。多くの発表者の中でとくに注目に値すると思われたのは、シュトゥットガルトのコンングレスでもすぐれた報告をしたハイデルベルクのマンフレート・リーデル「労働と行為——ヘーゲルと実践哲学のコペルニクス的革命」、プリンストンのウォルター・カウフマン（W. Kaufmann）「ヘーゲルにおける罪責の問題について」、フランクフルトのローベルト・シュタイガーヴァルト（R. Steigerwald）「市民生活を具体化する『下』の概念について」、ベルリンのヨファヒム・シュトライザント（J. Striesand）「市民社会の歴史的位位置」、ミュンヘンのヨーハン・デドライン（J. L. Döderlein）「ヘーゲルとファシズム」、ウィーンのエドゥアルト・ラボフスキー

ヘーゲル・コンングレス報告（中禁）

(E. Rabotsky)「ヘーゲルの労働概念と市民社会」などの諸氏であった。他の部会と同様にここでも東欧側の発表者には、ヘーゲルそのものを論するのではなくて、それを常にマルクス、エンゲルス、レーニンに結びつけようとする態度（これは先に述べた評価基準と軌を一にする）が顕著に見られた。

最終日の二十九日、午前はミュンヘンのデドライン教授の司会によってコンングレス全体にわたる総括的な報告とディスカッションが行われた。ここでも例えればヘーゲルは本質的には進歩的か保守的かなど、世界観の対立に由来するヘーゲル理解の相違がかなり尖鋭に反映されていた。そして最後にバイアー教授が立ち、次のようにわずか三個の文章から成る簡潔な、しかし迫力のこもった閉会の辞を述べて、このコンングレスは終わった。「われわれはヘーゲルに対してさまざまの立場をとる。しかしコンングレスは裁きの場ではない。裁くものは歴史である。」（一九七〇年十一月記）

（付記）この報告は雑誌『理想』四四九号に載せた拙稿「ヘーゲル・コンングレスに参加して」と重複する点が多い。対象と内容の性質上已むを得ないこととして御諒承賜りたし。

一四五（五六一）